

⑬ それからまもなく、あまりじょうぶでないゆみ子のお父さんも、戦争に行かなければならない日がやって来ました。

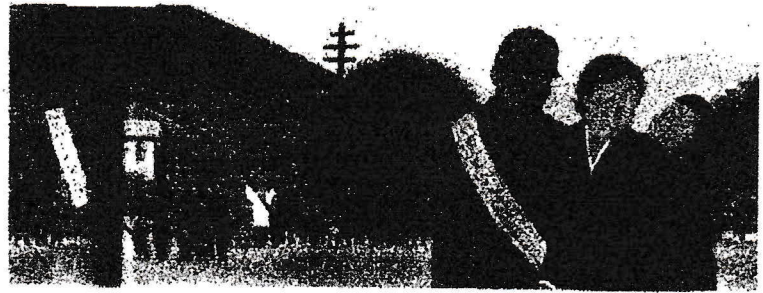
⑭ お父さんが戦争に行く日、ゆみ子は、お母さんにおぶわれて、遠い汽車の駅まで送っていききました。頭には、お母さんの作ってくれた、わた入れの防空頭巾をかぶっていききました。

⑮ お母さんのかたにかかっているかばんには、包帯、お薬、配給のきつぷ、そして、大事なお米で作ったおにぎりが入っていました。

⑯ ゆみ子は、おにぎりが入っているのを、ちやあんと知っていましたので、「一つだけちようだい、おじぎり、一つだけちようだい。」と言って、駅に着くまでにみんな食べてしまいました。お母さんは、戦争に行くお父さんに、ゆみ子の泣き顔を見せたくなかったのてしうか。

⑰ 駅には、他にも戦争に行く人があって、人ごみの中から、ときどきばんざいの声が起りました。また、別の方からは、たえず勇ましい軍歌が聞こえてきました。

⑱ ゆみ子とお母さんの他に見送りのないお父さんは、プラットホームのはしの方で、ゆみ子をだいて、そんなばんざいや軍歌の声に合わせ、小さくばんざいをしていたり、歌を歌っていたりしていました。



防空頭巾
防空頭巾は、頭を保護するために作られた。わた入れの防空頭巾は、おにぎりをかぶるために作られた。

泣き顔
勇ましい
軍歌

⑲ まるで、戦争になんか行く人ではないかのように。ところが、いよいよ汽車が入ってくるといふときになって、またゆみ子の「一つだけちようだい」が始まったのです。

「みんなおやりよ、母さん。おにぎりを——」
お父さんが言いました。

「ええ、もう食べちゃったんですの——。ゆみちゃん、いいわねえ。お父ちゃん、兵隊ちゃんになるんだって。ばんざいって——」
お母さんは、そう言っておにぎりをあげましたが、ゆみ子は、どうと泣きだしてしまいました。

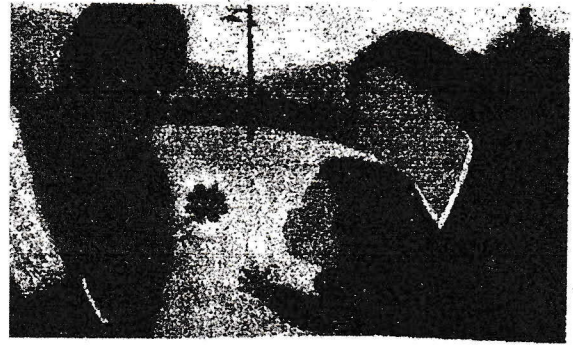
「一つだけ。一つだけ。」
と言って。

⑳ お母さんが、ゆみ子を一生けんめいあやしているうちに、お父さんが、ぶいといなくなっていました。

㉑ お父さんは、プラットホームのはしつぼの、ごみすて場のような所に、わずれられたようにさいていたコスモスの花を見つけたのです。あわてて帰ってきたお父さんの手には、一輪のコスモスの花がありました。
「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——」。

㉒ ゆみ子は、お父さんに花をもらうと、キヤッキヤツと足をばたつかせてよろこびました。

㉓ お父さんは、それを見てにっこりわらうと、何も言わずに、汽車に乗って行ってしまいました。ゆみ子のぎぎっている、一つの花を見つめながら——。



兵隊
一輪

24 それから、十年の年月がすぎました。

25 ゆみ子は、お父さんの顔覚えていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないのかもしれない。

26 でも、今、ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱい包まれています。

27 そこから、ミシンの音が、たえず速くなったりおそくなったり、まるで、何かお話をしているかのように、聞こえてきます。それは、あのお母さんでしょうか。

「母さん、お肉とお魚とどっちがいいの。」

28 と、ゆみ子の高い声が、コスモスの中から聞こえてきました。すると、ミシンの音がしばらくやみました。

29 やがて、ミシンの音がまたいそがしく始まったとき、買い物かごをさげたゆみ子が、スキップをしながら、コスモスのトンネルをくぐって出てきました。そして、町の方へ行きました。

30 今日は日曜日、ゆみ子が小さなお母さんになって、お昼を作る日です。



とんとんぶき
かわらの代わりには、
うすい木の板を打ち
つけた、せまっつな
階段。

●包む

今週発行
「こぼれ」110
O.D. 大塚書店
#1 作中、とんとん
子とお母さん
「こぼれ」の表紙